

マルクス利子論のジレンマ

友 岡 学

まえがき

- 〔1〕 マルクスとマホメット
- 〔2〕 商業と銀行業
- 〔3〕 費用としての利子
- 〔4〕 マルクスのジレンマ
- 〔5〕 企業者利得と企業労働
- 〔6〕 時は金なり

あとがき

ま え が き

この頃、国の内外で、利子に関する話題が賑やかである。

アメリカはレーガン大統領の高金利政策が国際経済に強いインパクトを与えていて、先進諸国は一様ににがりきっている。

日本では、金利一元化をめぐって、銀行・大蔵省対郵便局・郵政省の抗争が、郵貯懇（金融の分野における官業の在り方に関する懇談会、有沢広巳座長）の答申（1981. 8. 20）を契機に噴出した。

一方は金融政策問題、他方は金融制度問題である。わたし自身は、それらに関心を抱きはするが、じかにコメントする力を持たない。原論を事とするので、政策的課題に答えようとするよりも前に、原論的問題に興味を魅かれてしまう。例えば、利子率を上げたり下げたりすることはできても、利潤率を意図的に動かすことができないのはなぜか、というようなことである。

そういうわたしの立場からすれば、上の如き大事件よりも、むしろ、殆んど人目を引かないであろう単発的で小さな次のような事件の方がいっそう興味深い。

日本経済新聞は、今年のはじめ（1981. 1. 4）、ニューデリー発高橋特派員電を載せている。

パキスタン 「無利子口座」開く

世界初、国有銀行の窓口で

こういう見出しを受けて記事が続く。

ジアウル・ハク大統領のもとでイスラム化政策を進めているパキスタンは1日から、5つの国有銀行の窓口で「無利子預金口座」を開設した。「無利子」はコーランの教えにもとづくものだが、実際にはイスラム諸国の銀行預金にも利子がついており、この種の

預金口座の開設は世界で初めて。

果して無利子で預金する人があるのか、よそながら気になるが、その実態については後で触れるとして、わたしは、この記事に接して、イスラム教とマルクス主義の符号が何と一致していることかと思ったものである。わたしの瞬間的な印象は間違っていたのだろうか。イスラム教に体系的な利子論があるとは思えないので、この際、マルクスの利子論を見直すことにしよう。

〔1〕 マルクスとマホメット

中世ヨーロッパで、キリスト教会が利子（取引）を禁止したことは広く知られていることである。マルクスは近代の人であり、中世に身を置いて利子に対する価値判断をすることはあるまい。すなわち、マルクスにとって、利子禁止令は歴史的事件であり、歴史的意味を見出せばよい対象であった。彼は、条件つきながら、「高金利は、……新たな生産様式の形成手段の一つとして現象する」（『資本論』長谷部訳、青木文庫、⑩842ページ、向坂訳、岩波書店、Ⅲの2、751ページ。以下、その順序で略記する）と評価している。

教会が利子を禁止した理由は何であったのだろうか。高過ぎるのがいけないのか、利子そのものが教義に反するのか、貸借自体はどうなのか、等々、よく分らない。「貧しき者は幸いかな」であれば、高利貸は幸福製造者で、祝福されるに値こそすれ、亡ぼされる筋合いはあるまい（わたしの皮相な見解か？）。皮肉はさて置き、高利といえ、マルクスによれば——そのマルクスも他の著作によったのだが——「12～14世紀の普通の利率は20%を越えなかった。…ドイツ領ライン地方では10%が、すでに13世紀に普通の利率であった」（『資本論』⑩843ページ、Ⅲの2、752ページ）そうで、それに比べると現代日本のサラ金の方がはるかに古代的であり、（現行金利限度は109.5%。改正の動きがあり、自民党案で73%）アメリカの現在の高金利（20%になんなんとするプライム・レート）はいかにも異常に思える。

イスラム教の場合、利子禁止は、その聖書コーランに明記されている。

利息を食う人々は、サタンにとりつかれて打ち倒された者のような起きあがり方しかできない。というのは、彼らが「商売も、利息をとるのと同じではないか」などと言うからである。神は商売を許し、利息をとるのを禁じたまうた。（中央公論社『世界の名著』15巻、1970、91ページ。力点は友岡）

もっとも、これには裏がある。編者、藤本勝次氏が注記するところによると、マホメット（570ごろ～632）は終始そういう見解を持っていたわけではない。

利息 *riba* をとることを禁止する啓示は、メッカ時代にはない。商業都市メッカでは、利息をとることは普通の商行為で、マホメットは別に悪いこととは考えなかった。しかし、ヒジュラ後、ユダヤ人にたいする友好的態度を捨ててからは、ユダヤ人の高利貸への非難から、正当な商業活動を奨励しつつ、他方、高利貸の禁止を打ちだしたものと考えられる。（同上、91ページ）

ユダヤ人にはユダヤ人の言い分があろう。ラビ・M. トケイヤー氏によると、

中世ヨーロッパでユダヤ人に金貸しが多かったのは、キリスト教会がキリスト教徒には、利息をとって金を貸すことを禁じたからである。（助川明訳『ユダヤ格言集』実業之日本社、1977、66ページ）

トケイヤー氏はイスラム教について言及しているわけではないが、趣旨は当てはまる。この通りだとすれば、キリスト教徒は、利子をとって金を貸すことは禁じられても、利子を払って金を借りることは禁じられなかったのであろうか!?

キリスト教会にしても、マホメットにしても、本気で利子を禁止した、また出来ると思っただとはとても考えられない。本気ならば、(高)金利発生の原因を除去すべく努めなければならないが、それを手がけた様子はさらさらないのである。

皮肉なことに、マルクスが「教会にとっての利子禁止の効用」をある文献に語らせているところによると、

利子の禁止なくしては、教会や修道院はけっしてかくも富裕にはなりえなかったであろう。(『資本論』⑩864ページ、Ⅲの2、771ページ)

トケイヤー氏はもっと辛辣である。

キリスト教徒は、金や物質をいやしいものとして遠ざける。カトリックの神父を見れば、貧者を象徴する黒い服と白いカラーを着ている。このようにキリスト教では、金や物をもつことを罪惡視しているのに、バチカンの法王庁の蔵からして、ダイヤモンドや株券でいっぱいだし、われわれと同じように地上における贅沢を好んでいる。(同上書、61ページ)

イスラム教徒の間ではどうであったか。M. ロダンソン『イスラムと資本主義』(山内昶訳、岩波現代選書、1968)によれば、

「コーラン」がリバーを禁じているにもかかわらず、利つき貸借がひきつづき余るほど実行され……花盛り(であった。)(55～60ページ)

同書には、人びとがいかに法網をくぐったか、くどい程、その実例が紹介されている。コーラン自体、必ずしも首尾一貫しているとも思えない。神は商売を許し、利息をとる(貸借する)のを禁じたと言うけれども、貸借は商売(売買)にすぐ分解できる。貸借は時間をおいての売買である、利子(率)はその価格である、などと言う必要はない。双方にとって不急の物件を、まずAがBから100円で買い、一定期間の後に、BがAから110円で買えばよい。すなわち、非合法的な貸借は2つの売買によって合法化され得る。

イスラム教では、施し(贈与)が積極的に勧められる。

神は利息を無に帰したまう。しかし施しには利息をつけて返したまう。(前掲書、92ページ)

神との取引きだという純粋な教義解釈では、そこで言う利息は、精神的な恩寵ということになろうが、平凡な庶民は、形のある恵みを欲するに違いない。また、貸借を贈与に分解するのも訳はない。AがBに100円を施し、一定期間の後に、BがAに110円を施せばよい。

現代イスラム教はどう解釈しようとしているのであろうか。

パキスタン政府の発表によると、無利子預金は正式には「損益分担預金」と呼ばれ、預金者から預かった金を銀行が企業などに投資して利益をあげた場合、預金者は相応の「利益配分」を受け取れることになっている。しかし定率の「利子」というのではなく、また「利益配分」がいくらになるかも半年以上たってみないとわからない仕組みだ。

この新しい口座は普通預金及び定期預金に設けられ、銀行側は集まった金を従来の預金とは別に運用、6カ月ごとに預金者に利益配分する。……

銀行には従来通りの利子付き預金も併設させ、どちらを選ぶかは預金者の自由意思に任せることにしている。……

また、この制度の実施にかかわらず、パキスタン政府自身は外国の銀行に預けてある政府関連資金の預金利子は今後も受け取るという。(前掲、日本経済新聞)

ここまで読むと、肩すかしを食わされた感じがしないでもない。「無利子預金」とは、投資信託、あるいは株式の如きものであった。無利子預金を株式に、利益配分を配当に、それぞれ対応させると、利子(貸借)はよろしくないが、利潤(商売)はよろしいというコーランの教えに沿っていると解釈できそう。ついでに記すと、イランでもそういうイスラム化政策が進められているが、廃止される金利は「手数料」の形式に置き換えられるといった「現実的運営」がとられている。(『現代用語の基礎知識』81年版付録, 52ページ) しかし、イスラム教では、喜捨(ザカート)や布施(サダカ)、ひっくるめて贈与こそが最高の美德であることは変らない。(蒲生礼一『イスラーム』岩波新書, 1961, 132ページ)

贈与、売買、そして貸借という順に道徳的・宗教的価値が並べられるのに遭遇すると、マルクス(的社会)主義との相似性が思い出されてくる。マルクス(的社会)主義にとっては、産業(資本)、商業(資本)そして金融(資本)の順に、「搾取」という悪徳の度合いが高まる。そのことは、彼らが好んで用いる「範式」に表現されてもいるだろう。

(1) $G \text{---} [W \cdots P \cdots W] \text{---} G'$

(2) $G \text{---} [\quad W \quad] \text{---} G'$

(3) $G \text{---} [\quad \quad \quad] \text{---} G'$

(1)は産業資本の、(2)は商業資本の、そして(3)は金融資本の「運動」を表すとされる。[]の中は、何らかの社会的機能、あるいは労働を示すとみなしてよい。(1)から(2)、(2)から(3)へ移行行く程に、機能は空白化し、(3)に至ってゼロになる。(1)には「生産的労働」、(2)には「不生産的労働」が対応しているが、(3)には、いかなる意味の労働も対応していない。マルクス(主義者)においては、利子は最高の物神性を帯びており、商業利潤が(商業労働と同様に)必要悪としてその存在を許されても、利子は、あくまで、不必要悪でしかないのである。

〔2〕 商業と銀行(金融)業

産業と商業の間、商業と銀行業の間、この二つの間には、どんな質的な違いがあるだろうか。マルクスは、三者を極めて差別的に取り扱っている。

資本の見地では、マルクスは、産業資本と商業資本とを、例えば、平均利潤率形成への平等の参加を認めているが、銀行資本については、全く無視している。ただし、平均利潤率を商業資本抜きで説明しており、商業利潤の説明は、産業利潤の説明に比べて、歯切れが悪い。

労働の見地では、周知のように、マルクスは、商業労働を、産業労働に対して、(剰余)価値を産まない労働、不生産的労働だとみなしているが、銀行労働については認知さえしていない。

総じて言うならば、銀行業は、資本の見地でも、労働の見地でも、産業に対してはもちろんのこと、商業に対してさえも、極端に貶められている。

資本の見地で、「資本はその大きさに比例して——また大きさが同等ならば、同等な——剰余価値総量の分け前を要求する」(⑨263ページ, IIIの1, 216ページ)にもかかわらず、銀行資本が仲間外れにされるのはなぜだろうか。資本の資格を欠くものならば、銀行資本は言葉の矛盾である。マルクスの銀行資本の成分についての定義を見るがよい。

銀行資本は、(1)現金たる金または銀行券と、(2)有価証券とから、成りたつ。(⑩657ページ, IIIの2, 581ページ)

ただこれだけである。建屋もなければ、労働者もない。もちろん、「不変資本」「可変資本」という周知の資本概念は、銀行資本には一切認められない。

商業資本については、必ずしもすつきしたものではないが、ともかく不変資本(K)、商品資本(B)、(商業労働への)可変資本(b)の三成分で体裁を整えている。これは、商業資本が産業資本の一部分の「一特殊機能として自立化」(⑨385ページ, IIIの1, 331ページ)した姿であるとするその出生の経緯から来るのだろうか。銀行業が、氏素姓からすれば、産業資本の血筋は引いていないとしても、商業資本がすべて産業資本の系譜上にあるとするのは過度の一般化になりはしないか。

それはともあれ、銀行資本は、人であろうとして遂に人になり得ない猿人の如きものだ。

利潤の平均率は、利子を究極的に規定する最高限界と看なされるべきである。(⑩510ページ, IIIの1, 447ページ)

銀行の利潤は、一般的にいえば、貸すよりも安い利子で借りるところから生ずる。(⑩572ページ, IIIの1, 502ページ)

マルクスにあっては、利子(率)は利潤(率)よりも、つねに小でなければならない。その貸付利子(率)より借入利子(率)が差し引かれるので、銀行利潤(率)は、平均利潤(率)より、小さい方向へいよいよ遠ざかる。銀行資本家は、これでよく我慢できるものだ。なお、ついでに指摘すれば、銀行利潤の源泉を「貸すよりも安い利子で借りるところ」に見るやり方は、マルクス自身が、「売るよりも安い価格で買うところ」に利潤一般の源泉を見るのを激しく拒否したこととどう結びつくのか。

マルクスは、いずれも「資本」と平等に呼びながら、商業資本を産業資本に対してまず差別し、次には、銀行資本を、産業資本に対しては言うまでもなく、商業資本に対してさえ差別している。このイデオロギーは、現代のマルクス主義(的社会主義)者の骨髓にまでしみ込んでいるようだ。

資本主義に関して言うなら、半人前、あるいは人並扱いさえされない商業(資本)や銀行(あるいは金融)に関係する人びとの社会的・経済的役割やウェイトや影響力は、こうした理論からは説明のしようがあるまい。第3次「産業」への人口の移動が、第1次及び第2次(のいわゆる)産業における生産性の高度化と関連していることは間違いのないところであるが、すべてそれらの「産業」の剰余価値に支えられているなど言い続けるには、人並でない空想力が必要であろう。

社会主義に関して言うなら、マルクスに由来する商業や銀行業に対する蔑視、無視あるいは軽視が、その経済困難をもたらしている重要な原因であることはいよいよ明瞭になって来ている。

どうすれば、こうした偏見から脱出できるか。簡単である。利子(率)を(平均)利潤(率)の一部分であるなどの自縄自縛的な定義を捨てることである。

ただし、その前に、あるいはそれと関連して、(生産的あるいは不生産的)労働や(剰余)価値や利潤についてのマルクス(主義的社会主義者)特有のイデオロギー的思い込みから自由になることが必要である。特に、労働についての「生産的」と「不生産的」の区別が災いの根源にあるように思われる。労働価値説は、事実認識の点でそれなりの歴史的役割を果たしたけれども、「生産的」と「不生産的」を区別することで、善悪の価値判断を背負い込むことによって有害になった。マルクス主義的社會主義者に差別の精神構造が形成されたからである。(剰余)価値の創造者(生産的労働者)、(剰余)価値実現者(不生産的労働者)そして(剰余)価値搾取者(非労働者)という(剰余)価値をめぐる三層は、それぞれ必要善、必要悪そして不必要悪という道徳的価値の体现者という三層に序列化される。

もっとも、マルクスは、最初のうちは、「生産的」「不生産的」の区別が資本家の表象であるかの如く主張した。

資本家のために剰余価値を生産する労働者、または資本の自己増殖に役だつ労働者のみが生産的である。(③804ページ, I, 638ページ)

だが、いつの間にか、仮想の「資本家」の表象をわが表象として、マルクスは真実の資本家の表象について誤解する。なぜなら、資本家は、およそ、マルクスの剰余価値について全く無関心であり、したがって商業や金融を「不生産的」だなどと思ひ込んだり決してしないだろうから。

ともあれ、[利子(率)<利潤(率)]という不等式の否定は、「等量の資本・等量の利潤」という(それ自体の妥当性は措いて)資本の競争的条件に適合的である。簡単に考えても、銀行資本が平均利潤率に絶対的にとどかない利潤しか得られないとすれば、資本が銀行にとどまっていられるはずはないではないか。

さし当り、利子と利潤に関するマルクス(主義的社會主義者)の觀念が転倒しているのを指摘しておこう。マルクスは、「利子は利潤によって調整される」(⑩510ページ, IIIの1, 447ページ)と言う。もしそう言いたいなら、「利潤は利子によって調整される」と言うがよい。第1に、公定歩合政策は、そうであつてのみ現実的である。第2に、利子率は人びとにとって確定的に与えられているが、利潤率はあいまいである。第3に、利子率は、借入企業にとって費用として前提されているが、利潤率は事後的に算定されうるものである。

奇妙なことに、マルクス自身、利子率と利潤率のいわば成り立ちの違い、現われ方の違いを語っている。

たえず動揺する市場利子率について言えば、これは商品の市場価格と同様にどの瞬間にも固定的大いさとして与えられている。……これに反して、一般的利潤率はつねに、特殊の諸利潤率均等化の傾向・運動としてのみ実存する。(⑩519～520ページ, IIIの1, 456ページ)

利子は……固定されて、生産過程の開始以前、つまりその成果たる総利潤率が獲得される以前に、先取されるものとして前提されている。(⑩529ページ, IIIの1, 464～465ページ)

ここまで言っておきながら、マルクスが、一方が確定しており、他方が不確定的であるのに、一方が他方より小(あるいは大)であると断定し続けるのは何とも不思議である。わたしには、マルクスの先入観、はっきり言えば、貸付資本(家)に対する拭い難い偏見の故だと思えない。

〔3〕 費用としての利子

利子が利潤の一部分なんぞではないとなれば、新たに利子を定義しなければならなくなる。先に引用した文章中にマルクス自身、不用意(?)に言うように、「商品の市場価格と同様」のものであることは間違いない。どういう商品の価格であろうか。

ところで、マルクスは、また反転する。彼は、「資本としての資本は商品であること」を「決して忘れてはならぬ」と戒めながら、他方で、「もし人あって利子を貨幣資本の価格と名づけようとするならば、それは価格の不合理的形態であって、商品の価格なる概念とまったく矛盾する」(⑩502ページ, IIIの1, 440ページ)とも言う。確かに、100万円の貨幣資本の価格は10万円であるとは言えない。それならそれで、「資本としての資本は商品である」と、はじめから言わなければよかったろうに。それなら、何の価格なのか？ その答えをマルクスに期待することは無駄であろう。マルクスにとって、利子は、あくまで、利潤の一部分であり、利潤がそもそも何らかの価格というものではない。なぜなら、利潤は、何ものも要費されることなく、資本家に取得されるもの、何らの対価を要しないものであるから。だが、マルクスのこういう利潤概念がいかにかりそめのものであるかは、やがて「利潤の利子と企業者利得への分割」で見ることになる。

貨幣は、もちろん、それ自体商品ではない。ただし、これは、同一通貨体制下のことであって、異なった国民通貨の間では、双方が商品として価格(為替相場)を持ちうる。1ドルが200円(同じことだが、1円が200分の1ドル)であるということは、商品1ドルが200円ということだ。マルクスが、「資本は資本として商品である」というのは、そういうケースではなく、明らかにおかしい。利子を資本(という商品)価格であることが矛盾である以前に、「資本(という)商品」なるものが、そもそもおかしいのだ。(言葉の節約的表現なら許されよう。)

それでは、利子は何という商品の価格だと考えたらよいのか。

利子が貸借という関係に伴なって現われることは間違いないので、貸借の様々な場合を見ておくのが参考になる。貸借は、何も貨幣にのみ限られない。土地や住宅や種々の機械類がある。リース(lease)産業がこの頃普及している。レンタカー、有料道路(これも一種のリースである)、貸本、貸衣装、貸ふとん、貸ベット、等々。生産用、消費用を問わず、主として耐久財について行われる。そこで払い、払われる代金の名称も様々である。地代、小作料、家賃、リース料、レンタル料、通行料、(単なる)料金、使用料、等々。

ジェット機から事務機器まで、なんでも必要なものを貸します。「〈買う〉時代から〈借りる〉時代へ」というキャッチ・フレーズを掲げ、日本リース・インターナショナルなる新会社が昭和38年10月から営業を開始。この場合、借り手を企業に限っているが、この面での先進国米国では、一般の市民が日常生活での必需品テレビ、冷蔵庫、ステレオ、トランジスター・ラジオなどまで借りられるレント屋が大繁昌、「とにかく現代は、女房以外はなんでも借りられる」時代になっているとか。(『現代用語の基礎知識』65年増補版、自由国民社、1061ページ)

リースの料金は、基本的に、当該物件自体の価格と借用(又は使用)の期間によって決められ、その算定の基準は予め定められているはずである。付帯的に、例えば保守料が加

わることもあろう。この料金が、当該物件の使用（権の行使）に対して支払われることは申すまでもない。物件貸与者は、その間、その物件の使用（権の行使）から排除されている。すなわち、料金は当該物件の使用権の価格とみなしうる。排他的な使用（権の移動）が不可能な財や場合においては、リースは起りえない。一般道路がよい例である。

一般的に言えば、所有権は処分権と使用権とから成る。処分権と使用権とは相互に対称的ではない。処分権は所有権と不可分離であるが、使用権は所有権から一時的に分離可能である。ただし、非耐久財（瞬間財）はこの限りではない。もっとも、非耐久的であっても、非個性的で、同種の他の財で代替可能だと双方が認め合う場合には、貸借は成り立つ。例えば、米を10kg借りて、それを食べても、別の米を11kg返すという具合である。耐久財にあっては、返却は、借りた当の物件でなければならない（のが原則である）。損傷や亡失すれば、それなりの弁償がなされよう。

ふつうの売買は、当然、所有権の移動である。したがって、商品（のふつうの売買）価格は、当該財の所有権（という商品）価格と言ってもよい。貸借は、ある財の（期限つき）使用権（という商品）の売買であり、その価格は、当該財の使用料である。貨幣の使用権料が利子と呼ばれる。家賃が、家屋そのものの価格ではなく、家屋の使用権料であるのと同様である。

権利が売買の対象、すなわち商品となることは、著作権や特許権、名義、のれんや商標等で、すでにおなじみである。

耐久消費財が貸借されるということは、利子が利潤の一部分であるという見解に対して、反論の根拠となりうる。（マルクス自身、ロンドンで借家住いであつたに違いない。）それとも、例えば、貸本屋に支払う100円でさえも、利潤の一部分だとマルクス（主義者）は言い張るであろうか。マルクス（主義者）においては、単純な消費者（賃金労働者）の借金（マイナス預金）はもちろんのこと、銀行預金は許されないことである。なぜなら、困ったことに、借金をすれば、賃金労働者は取得する利潤（？）の一部分を利子として支払うことで、預金をすれば、利潤の一部分を利子として受け取ることで、それぞれその分だけ、賃金労働者でなくなり、あるいは機能資本家に、あるいは貸付資本家になるから。

貨幣は、もちろん、一般物件とは異質である。貨幣（の貸借）に関して銀行が成り立ち、物件（の貸借）に関してレント屋が成り立つとしても、両者、成り立ちの原理を異にする。

貨幣は、いわば永久財であり、レント屋が取り扱う物件は耐久財である。貨幣は、一片一片が非個性的で、完全に代替可能であるのに対して、耐久財物件は、いちいちが個性的で、原則として代替不可能である。だから、貨幣に関しては、一方から預かり（借り）、他方へ運用的に貸すことが可能であるが、耐久財物件に関しては、そういうことはまず不可能である。後者の場合、物々交換におけると同様な困難が避け難い。しかし、それ以前に、レント屋は、物件を借らずに成り立つが、銀行は、貨幣を預かる（借りる）ことなしには成り立たない。

ここに、ゴールド・スミスが銀行に成長脱皮したというイングランドの歴史的エピソードを解く論理の鍵がある。ゴールド・スミスは金（や銀）を材料として装飾品を加工製造する。材料、仕掛品及び完成品のいずれも高価で貴重だから、保管のために頑丈な金庫を設備しておかねばならぬ。安全の評判が立つと、金（地金）を持つ人びとが、たとえ細工を目的としなくても、料金を支払って保管を依頼する。はじめは、名札でもつけて、預か

り証を渡していたであろう。ここまでは、手荷物預かり所と同じである。預けた物件と預けた人（預かり証）とは一対一に対応しなければならない。しかし、やがて、ゴールド・スミスは、金（地金）が手荷物と異質であることに気付く。金の均質性は、手荷物の場合のような一対一対応という保管の条件を省くのを可能ならしめ、そして、預かった金（地金）を他に運用しても、ある割合いを金庫内に準備しておけば、引き取りに応じられるということである。まず、金（地金）の預かり証は、「金100ポンド、正に預かりました。ゴールド・スミス シェークスピア」という具合に簡略化され、更に、「金10ポンド」、「金5ポンド」、「金1ポンド」という具合に分割単位紙片の形になる。はじめは、ゴールド・スミスが依頼されて金を預かり、保管料を得ていたが、今度は、主客転倒して、ゴールド・スミスの方が、手数料を支払って、人びとに金を預けるのを依頼するようになる。こうして、ゴールド・スミスは銀行家に、預かり証は銀行券に、手数料は（預金）利子になる。運用は、もちろん、貸付けである。金の永久財性と均質性（非個性）及び分割可能性こそが、そういう転化の自然的原因である。金のそういう自然的性質は、金を物品貨幣の王者たらしめる原因であるけれども、それは貨幣そのものとして金が最適であることを意味するものではない。（わたしの「良貨が悪貨を駆逐する」本誌第22号、1973を参照）それはともあれ、他のどんな耐久財物件に比べても、価格としての利子率が極めて斉一的であり、ただ貨幣（のスカラー）量と貸借期間にのみ比例するという事実は、ひとえに、貨幣の上の如き特性に基づく。地代を論ずる場合に考慮しなければならぬことである。

利子が貨幣使用権料であって、利潤の一部分なんぞではないとすれば、利子は、借入企業において、当然に、費用として位置づけられる。他の商品、例えば原材料を買うのと同様に、企業は、手持ちに不足があれば、ビジネスの当初に、貨幣使用権を買う。その費用は、最終的には、生産物（商品）の販売収入によって補填される。貸す側からすれば、受取利子は、貨幣使用権の販売収入である。貸す側からであっても、受取利子が利潤の一部分でないのは、一般に商品の販売収入が利潤の一部分でないのと同様である。（利潤は、逆に、販売収入に含まれる。）

貸す側におけるそういう事情は、利子取得が、決して無償ではないことを意味する。マルクスは、最初のうち、産業資本に資本一般を代表させ、資本家がいかに利潤を無償で取得するかを力説した。ところが、商業資本を論ずる段になると、すんなり行かなくなる。そして、ついに、

この資本種類が資本として機能するのは、産業資本のように他人の労働を運動させることによってではなく、それ自身が労働する——すなわち売買の機能を果たす——ことによってであり、また、まさにそれに対し且つそれによってのみ、産業資本によって生みだされた剰余価値の一部分を譲り受けるからである。（⑨421ページ、Ⅲの1、364～365ページ、力点は友岡）

などと言ってしまうのだ。彼がいかに当惑しているかは、「困難」という弱音（とわたしには聞こえる）を、「商業利潤」の章で、実に6回も吐いていることから窺える。貸付資本を論ずるに至ると、利潤の分割部分だと言う企業者利得について、とうとう有償性を認めざるを得なくなる。しかし、今ひとつの分割部分たる利子だけは、無償性神話の最後の聖域として死守しようとし続けてやまない。そこまで陥落すれば、彼の搾取者という醜悪な資本家像が、彼の憎悪から発した空想の産物であることが暴露され、したがって営々と築

いて来た『資本論』の体系が一举に崩壊するのを恐れているからであろう。そのために、彼がいかに無理を重ねねばならなかったかを次に見よう。

〔4〕 マルクスのジレンマ

マルクスによれば、貸借という関係のもとで、利潤は利子と企業者利得とへ分割される。はじめは単なる量的分割であるが、後には質的分割になると言う。量から質へという周知の弁証法の定理(?)の応用かと思うと、必ずしもそうではないようである。というのは、ちょっと前にも、マルクスによって利潤は産業利潤と商業利潤とへ分割されたのだから、この場合には、むしろ、質の分割から始まり量の分割へと終わっているらしいのである。

利潤の説明に当たって、マルクスは商業(資本)の力を借りずに出来ると思い込んでいた。「商業資本としての商業資本はその際まだ吾々にとっては実在しなかったから」(④407ページ、Ⅲの1、352ページ)だそうだと。こういう假定自体、実はおかしい。産業資本(家)と言うけれども、商業機能を果さずに実在できるわけがない。実際、そのために、マルクスは、事実上、産業資本と商業資本とを同類視せざるを得なくなるのである。

理由は簡単である。産業資本といえども、売るために買っている。ただ、買いと売りの間に、マルクスの言う「生産(過程)」がはさまっている点が商業資本と異なるのみである。マルクス自身、「自分自身の商人でもある産業資本家」(④417ページ、Ⅲの1、361ページ)と、思わず口走っている。要するに、たとえ産業資本の売買を「自立」した商業資本が「代行」するとしても、その全部を代行して、産業資本から、売買機能を全く省くことはあり得ないのだ。例えば産業資本は、以前は、ある産業資本から買い、他の産業資本へ売ったが、以後は、ある商業資本から買い、他の商業資本へ売る。マルクスの範式自体それを示している。 $G-W \left\{ \begin{matrix} P_m \\ A \end{matrix} \dots P \dots W' - G' \right.$ の前後を見るがよい。ちゃんと、 $G-W$ 、 $W'-G'$ があるではないか。だから、等量資本・等量利潤というのは、それ自体、別におかしくはない。それでも、商業利潤を論じ終るに当たって、両資本の質的区別にこだわって言っている。

産業資本にとっては、流通量は…空費である。この流通費…は、商業資本にとっては生産的で…ある。(④431ページ、Ⅲの1、374ページ。力点は友岡)

ところが、利子と企業者利得とを論ずる段になると、産業資本と商業資本との質的区別に対するマルクスのこだわりは、なしくずし的に消え行く。あたかも、両資本(家)は、貸付資本(家)に対して、統一戦線を組んでいるが如くである。「機能資本」、「能動的資本家」、「作業する資本家」、「資本充用者」、「機能資本家は…空職ではない」、「怠惰な所有に對立する資本の機能」等々。そして、遂に、故意にか不用意にか、「生産(的)資本家」(④498ページ、Ⅲの1、436ページ)という名誉ある称号を、商業資本家にも呈上するのだ。

要するに、もともと、「産業」または「生産」と「商業」の間に、「生産的」の有無について、それぞれの資本や労働に質的区別がある訳でもないのに、それがあると言い張るものだから、こういう無様な仕末になったのだ。

こういう前例からすると、量的分割から質的分割への転化などというのも、格別意味あることだとは思えなくなる。もし意味あることだとすれば、利子と企業者利得とは、最初から異質のカテゴリーであるのに、ともに同質の利潤であると誤まって規定してしまったことの告白だということだろう。躰きの石は、利子をどこまでも利潤の一部分だとする(当

時の「俗流経済学」そのままの)マルクスの信念であるように思われる。

利子も企業者利得も、ともに、利潤の一部分であれば、当然に、同質利潤の異なる量的分割であって、一方が多ければ他方は少ない。その分け合いのチャンスが、産業利潤と商業利潤の場合のように、それぞれの資本量に比例して対等であれば、質的分割など言わなくて済むのに、それがそうはいかないからマルクスが苦勞するのだ。利子の方が企業者利得に優先する。「けだし利子は、…生産過程の開始以前に、先取されるもの」(⑩529ページ, IIIの1, 464~465ページ)だから。ここに、始めて、事前と事後の問題が登場する。しかし、マルクスは、事前と事後の区別に格別注意を向けることなく、むしろ、所有と非所有の区別に、質的分割論を引き寄せて行く。

機能資本家はここでは資本の非所有者だと想定されている。資本所有は、…貨幣資本家によって代表されている。(⑩530ページ, IIIの1, 466ページ)

これに、賃金労働者=非所有、資本家=所有の区別を重ね合わせるのも一興である。

利子は、資本自体・生産過程を度外視した資本所有・の果実であって、企業者利得は、過程しつつある・生産過程で作用しつつある・資本の果実である。(⑩531ページ, IIIの1, 467ページ)

その後は、企業者利得が、いかに利子と質的に異なり、また異なるものとして「現象」するか、あるいは「表象」されるか、「本質」と「現象」との区別が考慮されることなしに、繰り返し論じられる。マルクスが言いたいのは、利子も企業者利得も「本質」は利潤、ひいては剰余価値であるのに、企業者利得は「指揮監督労働」の代償として、すなわち利潤でないものとして、利子は単なる「所有」の果実として(企業者利得を手にする機能資本家に対立するものとして)、それぞれ「現象」し、あるいは「表象」され、貸付資本家は賃金労働者の前に直接姿を現わさないで、資本と労働力の敵対的關係が隠蔽されるという筋書きである。

利子と企業者利得は異質(所有所得と労働所得)のものとして現われ、あるいは思われているが、そうではなくて、同質のもの(利潤、ひいては剰余価値)なのだ、ゆめゆめ疑うでないぞというわけだ。産業資本と商業資本は、それとはちょうど逆に、同質(機能的)のものとして現われ、あるいは思われているが、それがそうではなくて、異質(「生産的」と「不生産的」)のものなのだ、ゆめゆめ疑うでないぞというわけであった。

二つの事柄は両立するだろうか。両立しない。(マルクス自身そうしているように、)産業資本と商業資本は(両者まるまる借受資本だと仮定すれば)、本質の上では同じでありかつ異なるということになるからだ。

これは、マルクスの(本人が自覚しているかどうかは別として)ジレンマあって、事実のジレンマではない。事実、マルクスの思い込みとは逆に、利子と企業者利得とはもともと異質であるのに、マルクス(主義者)には同質だと表象され、産業資本と商業資本とは、役割上の違いは別とすれば、もともと資本として同質であるのに、マルクス(主義者)には異質だと表象されたということだ。

マルクス自身、産業資本と商業資本とを、こみで「機能資本」と呼び、うっかり「生産(的)資本」と口をすべらせたことを先に指摘したが、利子と企業者利得についても、同様の混乱を見せている。すなわち、ある所で、「純利潤と利子とへの利潤分割」(⑩528ページ, IIIの1, 463ページ)という具合に、企業者利得を純利潤だとするかと思うと、その記憶

が消えないうちに、別のところで、「利子は…資本所有がもたらすところの…純利潤である」(⑩538ページ、Ⅲの1、472ページ)と、今度は利子を純利潤だと言って平然としている。なお、「利子と本来的利潤とへの利潤の分割」(⑩505ページ、Ⅲの1、442ページ)という具合に、企業者利得を本来的利潤と呼ぶこともあった。

産業資本と商業資本とが、ともに「資本」と呼ばれているように、資本として同質だということは、産業労働と商業労働とが、そうであるように、「(剰余)価値」を生むの生まないのという(「生産的」か「不生産的」かの)区別がナンセンスであることを意味するだけではなく、貸付資本も、資本としては、「機能資本」と何ら異質ではない。したがって、マルクスが「監督および指導は……どんな結合的生産様式においても為されねばならぬ一つの生産的労働である」(⑩544～545ページ、Ⅲの1、478ページ) (「現われる」ではなく「である」と言っていることに注意)と認めざるを得なかったことが、そっくりそのまま貸付資本あるいは銀行資本にも当てはまるという理解へ道を開く。もちろん、その場合、マルクス(主義者)専用の「剰余価値」といっしょに、特有の利潤概念も捨てねばならぬ。

利子と企業者利得とがもともと異質だということは、両者がともにそれぞれ利潤の一分割部分であるとするのが誤解以外の何ものでもないことを意味する。すでに言及したように、利子は、支払う(借りる)側にとって、事前に確定された価格として優先的に支払わねばならない費用であり、受取る(貸す)側にとっては、貨幣使用権という商品の販売収入である。利潤や企業者利得との関わりは、それらの定義をそのまま使ったとしても、貸す側に生ずるのであって、借りる側に生ずるのではない。もし、借りる側に生ずるとすれば、利子と企業者利得の間に、優先性の差が起こるはずはないし、利子(率)が事前に確定されるはずもない。

〔5〕 企業者利得と企業労働

最初、資本家と(賃金)労働者だけがあつた。資本家は、資本を所有する者、あるいは資本が人格化した者であり、労働者は、労働力を所有する者、あるいは労働力が人格化した者であつた。もちろん、労働者は、資本については非所有者である。しかし、資本家が、労働力について、所有者であるのかどうか、マルクスは明言していない。(それが「搾取する労働」への伏線であろうか。)たとえ、資本家が労働力を所有しているとしても、みずから使用する、すなわち労働することはあり得なかった。もしあつたら、同一人物が資本家でもあり労働者でもあることになる。資本家が、労働力は所有するがみずから労働しないとすれば、きっと彼の労働力は錆ついてしまっていただろう。

剰余価値の生産と取得において、一見安定的であるかに見えたこの関係は、商業に言及せざるを得なくなった途端に、動揺し始める。商業労働者は、その名の通り労働する(ただし、その労働は価値を生まないらしい)のがはっきりしているが、商業資本家については、労働するが如く、しないが如く、至ってあいまいである。商業労働者を雇用しているなら、労働をしない資本家でいられようが、それがそうもいかないのは、

商人的資本家は……彼の事業および資本が小さければ、彼自身が、彼の充用する唯一の労働者であり得る。(⑨415ページ、Ⅲの1、359ページ。力点は友岡)

などと、これまでの資本家と労働者についての定義を一切台無しにするようなことを言

わずにおれないところに示されている。

- (1) 資本家は、資本の大小で定義されはしなかった。
- (2) 労働者を雇用しないで資本家は存在できなかった。
- (3) 資本家は労働者ではなかった。

利子を論ずる段になると、必然的に、企業者利得という利潤の片割れに触れねばならなくなり、利子との対照を強調すればする程、少なくとも利潤の一部分、企業者利得という名の利潤は、懐手をした資本家にひとりでに転がり込むのでないことを、しぶしぶ認めざるを得なくなる。おきまりの弁法を使うところによく示されている。「企業者利得は労働の監督賃だという表象は、企業者利得と利子との対立から生ずる」とか、「労賃の一部分は資本制生産様式の基礎の上では利潤の不可分の成分として現象する」(⑩544ページ、Ⅲの1, 477～478ページ。力点は友岡)とかがそれである。

「企業者利得と利子との対立」はマルクスの「表象」であり、したがって、企業者利得は労働者の監督賃だという事実(このままが正しいかどうかは別として)は、ありもしない「企業者利得と利子との対立」から生ずることはない。最初から存在していたはずである。先に引用したように、マルクス自身、ついつい断言したではないか。「監督および指導という労働は……どんな結合の生産様式においても為されねばならぬ一つの生産的労働である。」(⑩544ページ、Ⅲの1, 478ページ。力点は友岡)これを、資本家と労働者について語る最初から言えば、何も困ることはなかったのだ。もっとも、彼が、

直接的生産過程が、社会的に結合された過程の姿態をとっていて、自立的生産者たちの個々別々の労働として現われない場合には、つねに監督および指導という労働が必然的に生ずる。」(⑩544ページ、Ⅲの1, 478ページ、力点は友岡)

つまり、「自立的生産者」には、監督・指導の労働はない、と言うのはいただけない。個々別々の労働では、人びとは、自分自身を監督・指導する。だから、単独労働であろうと、結合労働であろうと、監督・指導は必然的なものだ。ただ、後者にあって、人別に、分担される形でそれとして現われる点が異なるのみである。マルクス自身、人間の労働がいかに「合目的的」(②331ページ、Ⅰ, 232ページ)であるかを力説しておきながら、ここではけろっと忘れてる。

しかしながら、企業(者)の労働は、「監督・指導労働」、あるいは単なる「監督労働」に矮小化されてよいものではあるまい。それにとどまらず、マルクスは「搾取する労働」(⑩543ページ、Ⅲの1, 477ページ)とさえ認め、それに対応して、ふつうの労働を「搾取される労働」とけなし、

賃労働者もまた、奴隷と同様に、彼を労働させ、統御するための主人を有たねばならぬ(⑩548ページ、Ⅲの1, 481ページ)

と、ついつい、ホンネの労働者観を洩らしてしまった。

わたしは、企業労働の特性は、不確定の未来世界へ乗り出す意思決定にあると考えている。組織、統制、指導、監督、調整、管理、等々は、企業労働に随伴し、あるいは企業労働を支えるけれども、意思決定を離れての企業労働はあり得ないだろう。

企業者利得は、その名称の当否は措いて、こういう企業労働に対して支払われる。それが利潤であるとするれば、企業労働は事後的にのみ評価され得るからである。あくまで事後的であるから、利子と違って、その量は事前的には不確定であり、したがってプラスであ

る絶対的保障は何もない。当然に、利潤は剰余価値なんぞという正体不明、証明不可能のしるものとは、一切関係ない。もし、そういう言葉を用いたければ、「不足価値」という言葉を対置しなければならない。マルクスは、しょっちゅう「(一般) 利潤率20%とすれば」と仮定するが、利子率と違って、これは許されないことである。

剰余価値を正体不明と言ったが、マルクス自身、その正体を見失っているような様子であるのは、何ともあわれである。ちょっと道草を食うことにする。

マルクスは言う。

貸付けられる貨幣は、その限りでは産業資本家に対する位置から見た労働力と特定の類似点を有する。ただ、産業資本家は労働力の価値を支払うが、貸付資本の価値の方は単純に返済するだけである。産業資本家にとっての労働力の使用価値は、労働力そのものが有するよりも多くの価値(利潤)をその消費によって生みだす、ということである。この価値超過分が産業資本家にとっての労働力の使用価値である。かくして貸付貨幣資本の使用価値は、同じように、価値を生みかつ増加する能力として現象する。(④499ページ, IIIの1, 437ページ)

何気なしに読み過すと、もっともらしく、マルクスによる貸付資本家にとっての貸付資本と産業資本家にとっての労働力とのアナロジカルな組合せに、つつい感心してしまいそうである。(なお、「資本としての貨幣」の使用価値——平均利潤を生みだす能力」〈上引用文の直前〉が、「労働力の使用価値——(平均) 剰余価値を生みだす能力」にそっくりの形式であることに注意しよう。しかし、これによって、資本と労働力を同質視することになるとは、マルクスの図らざることであった。)

しかし、注意して読むと、マルクスが思い違いしているのに気付く。貸付資本家における貸付資本(の使用価値が平均利潤を生みだす能力)は、アナロジーとしては、労働者における労働力(の使用価値が平均剰余価値を生みだす能力)に対応する。産業資本家に対する位置から見た労働力を取り上げるなら、対応するのは、借受資本家(「機能資本家」)における貸付資本、したがって借受資本でなければならない。

このように、折角のアナロジカルな組合せを正しい位置に改めると、今度は、剰余価値と利子が行方不明になる。

貸付資本家(A)は、所有する貸付資本(a)商品(マルクスの定義)を産業資本家(X)に売る(貸す)ことで、それ自身の価値を越える利子(a)を得る。それでは、労働者(B)は、所有する労働力(b)商品売る(貸す)ことで、それ自身の価値を越える剰余価値(b)を得なければならない!? それなのに、マルクスは、剰余価値(b)を得るのは、労働力(b)商品を買った(貸した)労働者(B)ではなく、それを買った(借りた)産業資本家(X)だと言うのだ。もし、それが事実なら、利子(a)を得るのは、貸付資本(a)商品を買った(貸した)貸付資本家(A)ではなく、それを買った(借りた)産業資本家(X)でなくてはならぬ!? 剰余価値(利潤)については、買った(借りた)側が取得すると言ひ、利子(利潤)については、売った(貸した)側が取得すると言う。

本論に戻ろう。企業者利得が企業労働に対応するとすれば、銀行業に代表される資本貸付業にも、当然に、企業者利得が考えられねばならぬ。貸付けは単なる所有とは違う。もっとも、所有自体、無為の如くマルクスに表象されているが、保管や維持等を伴うし、何よりも先に、取得されねばならない。一身に体现されるか、複数の人びとの間で組織的に分

担され合うかの違いはあれ、貸付業には企業労働と作業労働(この両者の区別については、わたしの「企業と利潤」鹿児島県立短期大学「商経論叢」14号、1965、を参照)の人的費用はもちろんのこと、種々の物的費用を伴う。利子収入は、それらの費用を償なうものでなくてはならぬ。それを超過あるいは不足する収入が結果として出現すれば、その分が貸付資本にとっての利潤であろう。

〔6〕 時は金なり

マルクス(主義者)にとって、利子と貸付資本家は、資本主義悪の物的・人的象徴である。「現象する」、「表象される」と操返し言ううちに、その「表象」を自分自身の信念に変えてしまったようだ。その過程のなかで、最初の無為の資本家は、表向きには「機能資本家」、裏向きには「搾取する労働者」として罪一等を減じられた。

貨幣資本家に較べるならば、産業資本家は労働者——といっても、資本家としての、すなわち他人の労働の搾取者としての、労働者——である。(⑩549～550ページ、Ⅲの1、483ページ)

そうだとすると、貸付資本家は、搾取するという労働さえしない搾取者(!?)ということになるだろうか。盗人の親分は、盗みという労働をする盗人の上前をはねる盗みをしない盗人(!?)というわけだ。

この利子なる範疇は、マルクスによれば、「貨幣資本家と産業資本家とへの資本家の分裂」(⑩525ページ、Ⅲの1、461ページ)、すなわち貸借関係によってのみ「創造」され、「産業資本自体の運動と無縁」(同ページ)であり、その場合、「利潤はすっかり彼のものである。」(同ページ)

これは、「利子と企業者利得」に関する章の冒頭発言であるが、利子に対するマルクスの価値観が吐露されているように思える。マルクスにとって、利子なるものは、甚だ迷惑な存在なのだろう。それは、一般的に、経済自体の運動とは無縁であるばかりではなく、産業資本の運動とも無縁である。利子が資本主義に在るのは、資本主義の本質を隠蔽する役割を果たすためだけである。

わたしの考え方は、マルクスとは方向的に正反対である。利子のおかげで、資本主義の本質が顕現されるのではないか。「資本主義の本質」とはオーバーであると言われるなら、「利潤」の本質と言い換えよう。利潤は、当初からマルクスが主張して来たようなものではなかったことが、利子の登場で暴露されたということだ。つまり、マルクス(主義)経済学の本質が、ここに来て、マルクス(主義者)に全く迷惑である形で、露見したのだ。

利子の片割れとされる企業者利得についてのマルクスの説明は、それがいかに(当初定義された)利潤とは異なるものかについてであり、その説明が成功すればする程、自己資本だけを充用する産業資本家がすっかり自分のものにする利潤が、いかに当初定義された利潤ではないかを証明することになる。なぜなら、その産業資本家がすっかり自分のものとする利潤のかかなりの部分が企業者利得であろうから。要するに、利子と企業者利得についてのマルクスの定義に従っても、自己資本をまるまる充用する産業資本家(これが、マルクスの当初からの資本家であった)は、一身において、貸付資本家と機能資本家を兼ねている(自分の資本を自分に貸付ける＝自分の資本を自分から借受ける)ので、彼がまるまる手にする利潤なるものは、もともと、利子と企業者利得であったのだ。利子について

はともかく、少なくとも企業者利得分については、困惑して「搾取する労働」などとあらぬことを口走りながらも、不労所得性という当初の主張から逸脱しているのは確かである。

マルクスがいかに困惑しようとも(もっとも、本人が自覚しているとは限らないが)、わたしたちがいっしょになって困惑することはない。企業者利得は、はっきりと、企業(者の)労働の報酬だとして一向に差しかえないだろう。利子については、すでに、わたしなりの考え方を示した。利子は借受け側にとっては費用以外の何ものでもないが、貸付側にとっても、質量ともに利潤そのものではない。要するに、利子は、利潤とは直接的には関係のないカテゴリー、ふつうの商品価格と同じような価格である。ただし、貨幣使用権という独特の商品価格であるという点で、ふつうの商品価格とは異なる。どう異なるのかと言うと、時間要素が利子には不可欠だという点である。貸借が時間と切り離せないから当然である。耐久財一般の貸借でも、その点は共通する。しかし、土地を含めた耐久財の貸借には、それぞれの財の性質によって、空間要素が強くあるいは弱くからんでいて、地代的形態が現われる。

財の空間要素とは、財の個性あるいは非代替性と言い換えてもよからう。貨幣だけは例外である。貨幣が貸借される場合、一片一片の形状や重さや色彩や性能等の品質が考慮されることは全くない。そういう考慮は、耐久財一般の貸借においては、ゆるがせにできない。しかし、商品のベクトルとしての価値が貨幣によってスカラーとしての価格で表現されるのと同様のことが、耐久財使用権という独特の商品についても起る。いわゆる資本還元がこれである。資本還元は、耐久財使用権料を貨幣使用権料としての利子になぞらえて、耐久財使用権料のいわば元金を算出することである。当然に、耐久財自体の商品価格とは必ずしも一致しない価格が示される。そのズレの程度が売買と貸借の間の選択に対して指針となる。

貨幣に空間要素が無いことは、貨幣使用権料としての利子率が、どの貨幣片に対しても一様に表現される理由である。また、この性質に、ゴールド・スミスについての歴史的エピソードを語った際に示唆したところだが、貸借という経済行為の一般性が根拠づけられる。例えば、本を貸したら、その当の本が返されねばならないが、貨幣については、貸した当の個片が返されねばならぬことはない。そこに、支払手段という特別の機能を貨幣のみが持ち得る理由の根拠があるのは容易に理解されよう。貨幣の存在しない社会があり得ると夢想するのでない限り、貸借は、売買と同様に、人間につきものだとするのが至当であろう。少なくとも、貨幣に支払手段機能を認めながら、あたかも経済自体の運行に貸借が不必要であるかの如き言明をするのは、貨幣に流通手段機能を認めながら、商業を除外した形で産業資本の自己運動が可能であるかの如き言明をするのと同様に、自己矛盾も甚だしい。何よりも、資本が貨幣の転化したものならば、貨幣の流通手段機能はもちろんのこと、支払手段機能も資本に包蔵されているはずだ。

残された紙数が乏しいので、結論を急ごう。利子(率)は、確かに貸借という交換の一形式から現われて、人びとにひとつの経済的カテゴリーとして認識されるに至るけれども、それは、もともと、資本使用という経済活動自体に伏在するからであるとするのが至当であろう。他に例を引けば、賃金は雇用関係で現われ、ひとつの経済的カテゴリーとして認識されるが、雇用関係のない状態(いわゆる自家営業、あるちは小商品生産、あるいは「単純商品生産」)での労働に対して潜在的に支払われているのだ。改めて、自己の労働に対す

る賃金を費用として計算するのは、経営の合理化（換言すれば、資源の有効利用）に欠かせない。マルクスは、

自己資本だけを充用して借受資本を充用しない資本家も、自分の純利潤の一部分を利子という特殊範囲に入れ、またかかるものとして特殊的に計算するということが、どうして生ずるか？（⑩528ページ，Ⅲの1，463ページ）

と問っているが、マルクスにとっての関心は、それが可能となる技術的根拠であって、それが持っている経営上の意味ではない。資本家が、充用する自己資本について利子率を計算するのは、資本費用、すなわち資本としての貨幣使用権料という費用を計算することで、自己の経営がその費用を補填し得ているかどうかを確かめるためである。もし、補填が達成されない状況ならば、彼の資本充用の仕方は選択を間違っていることになり、可能ならば、それを引き上げて、貸付資本化した方が、彼にとってばかりではなく、資源の有効利用の見地からも、利巧であることになる。それは、ちょうど、先程の自家営業者が、自己労働の賃金を費用として計算し、それを補填し得ないことを知れば、他の企業に雇用される途を選択するのが賢明であるのと同じである。

要するに、利子（率）は、資本の効率（ひいては、資源の有効利用）を知る規準、しかも、変動はしても、その時々でつねに一般的に衆知の形で確定されている客観的規準である。

あ と が き

タダほど高いものはない——という諺がある。いろいろ解釈ができる。

(1) 物はタダだが、それに勝る心の負担が残る。相手への精神的隷属が、隠された代償である。

(2) タダだと気がゆるみ、墮落して、自立心を失なう。

(3) 希少性についての感覚が失なわれ、歯止めが効かず、無駄使いが広がり、いずれそのツケが大きくなって返って来る。

人の世には、もともと、タダの物などあり得ないと、その諺はいましめているのであろう。ひとりで暮すとすれば、働らいただけの収穫しかないのは分りきっている。動物は、一般的に、そうしたものだ。人は、ひとりで暮せない。助け合ってこそ生きられる。助け合いが安定的、恒常的であるためには、助け（give）と助けられ（take）とが、人びとの納得のできる程度において、釣合っていなければならない。

助け合いは、同時的に起るとは限らない。助け合いを助けの交換とすれば、同時的交換は売買であり、異時的交換は貸借である。

人それぞれの個性は異なる。異なるから交換が成り立つ。貸借でも同じである。「明日の十両より今日の五両」という諺があるが、それだけでは片手落ちであって、「今日の五両より明日の十両」と、両々相俟って、はじめてこの諺は成り立つ。

人類の祖先は、いつの頃からか、またどういう理由からかは分らないが、たいして勞せずに食糧が得られる熱帯の森林から出て、きびしい環境のサバンナに入った。その森林に留まり続けた親類は、遂に人類になることはなかった。

現代の日本の子供たちについて、過保護が憂慮されている。勞せずして欲するものが手

に入る環境にどっぴりひたりきると、やがて、彼らは遠い祖先の親類に立ち返ることになるやも知れぬ。

子供たちだけではない。福祉の在り方のどこかにひずみが生じ、たかりの構造が形成されたのではないかという意見が出はじめた。交換原則が無視されると、人の社会はもういものだ。精神は荒廃し、徳義はすたれる。資源の浪費が起る。そして、遂には、社会そのものが行き倒れる。福祉を高めようとする主観的努力が、福祉の客観的条件を打ち壊すという自家中毒が起るからである。(わたしの「福祉を市場に探る」本誌第25号、1976、を参照)

マルクス主義(的社会主義)は、交換を悪の根源であるかの如く、忌み嫌う。交換システムから切り離された人びとは、脅迫システムに投げ込まれる。物心両面の貧困が恒常化される。人的・物的両資源の壮大な浪費が展開する。

もちろん、人という存在は、利害打算を越えもする。良きにつけ、悪しきにつけ、ロマンティシズムにも染まる。愛もあれば、憎しみもある。交換システムだけで、生活の全体がカバーされているわけではない。それを承知の上で、否、むしろ、それを承知すればこそ、可能な限り、生活の中に交換システムをビルト・インすることが大事であることを、わたしは強調したい。(1981. 10. 13)

追記 原稿を書き終えて、森詠氏の「利子のない国パキスタン」についてのコメントが目にとまった。(『イスラム経済への12の扉——7. 原理主義派と近代派』経済セミナー、1981. 10) 参照してほしい。